

## 現代社会の問題と保育内容「人間関係」の課題

榎原博美

## はじめに

1960年代以降、産業化とそれに伴う都市化の急速な進行により地域社会は大きく変容してきている。都市化は人口の都市への集中を促し、都市勤労者世帯の増加や都市的生活様式の浸透により核家族化を進行させていった。このような都市化・核家族化により地域社会はどのように変容し、子どもにとっての地域生活・家庭生活はどのように変わっていったのだろうか。

都市化によってもたらされた地域社会の最も大きな変化は地域における人々の地域関係や近隣関係の衰退化である。このような大人社会における地域関係・近隣関係の衰退は地域の子どもの同士の仲間関係の衰退化にも影響を及ぼす。また農村的な大家族は少なくなり都市勤労者家庭における核家族や少子化によって家族の規模も縮小化の一途をたどっている。本稿では、これら家庭や地域社会の変容とそれによってもたらされる子どもにとっての人間関係の問題について明らかにしたうえで保育内容「人間関係」の課題について示したい。

## 1. 家庭・地域社会の変容と仲間関係の崩壊

## (1) 家庭の変容と家族の縮小化

近年における家庭の変化として核家族化や少子化に伴う家族構成の小規模化＝縮小化があげられる。総務省の平成22年の国勢調査によれば図1のように一般世帯の世帯規模は1960年の4.14人から2010年には2.48人へと大幅な減少が続いている。世帯の小規模化の傾向は、核家族化と出生率の低下による1夫婦あたりの子どもの数の減少によるものが大きい。出生率の低下を示す指標として合計特殊出生率がある。この値の減少は1989年における1.57ショックと呼ばれる現象以降「少子化」のキーワードで現代社会の危機を示すものとなった。少子化の背景には女子の高学歴化や女性の社会進出、経済の不安定さによる若年者の就業の困難を背景とした晩婚化や非婚化の状況がある。

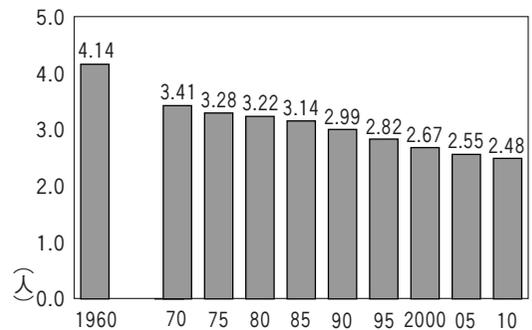


図1 一般世帯の1世帯当たり平均人員の推移

資料総務省「平均22年国勢調査 抽出速報集計結果」、国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集2011」

出典

財団法人日本統計協会『統計でみる日本2012』平成24年1月、(株)産業統計研究所

厚生労働省の人口動態統計によれば平均初婚年齢と合計特殊出生率を合わせた変化においても平均初婚年齢が上昇する一方で合計特殊出生率は低下していることが示された。生涯未婚率の推移と相まってこの傾向は今後も続く予想される。

家族が縮小化することで子どもの育ちはどのように変化するのだろうか。核家族では家庭における子どもにとっての人間関係は、少ないきょうだいと親との関係だけに限定される。それによって以前大家族だった時代のように家庭内で多様な人間関係を体験することが困難になってきている。3世代同居や大家族のしがらみや煩わしさから開放されて都会のマイホーム的な核家族には自由でのびのびした印象がある。

反面、これまで祖父母から親へと受け継がれてきた子育ての伝承もなく、年齢の離れた異なる世代の人の考えにふれることもできない。現代の母親自身が核家族で育てているため出産するまで一度も赤ん坊や幼い子どもと接触したり子守をした経験がない(原田2003)という問題もある。このような育ちを背景とした母親の子育ては育児書やインターネットなどメディアからの情報に頼るマ

ニュアラルなものになりがちである。少ない子どもをよりよく育てようとの意識のあまり早期教育が過熱したり、子育ての不安から虐待に走るケースも少なくない。児童虐待に関する相談件数は増加の一途をたどっている。家庭であれば安心、母親であれば安心というような状況にないことは明らかである。

このように本来人間を第一義的に育て人間関係の土台づくりを担う家庭が変容していることで、子どもの豊かな人間関係づくりが根底からゆらいでいる状況がある。

## (2) 地域の変容と人間関係の希薄化

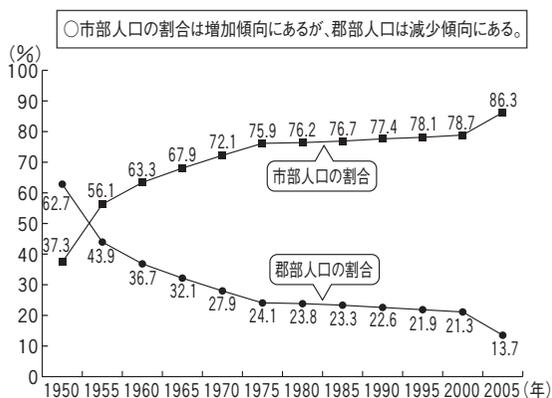


図2 市部・郡部人口割合の推移

資料：総務省統計局「国勢調査」

- (注) 1. 1955年の数字は町村合併推進法、また2005年の数字は市町村合併特例法による市町村合併特例法による市町村合併及び新市成立の結果、それ以前の数字とは異なっている。
2. 1960年の長野県西筑摩郡山口村と岐阜県中津川市の間の境界紛争地域の人口(73人)及び岡山県児島湾干拓第7区の人口(1,200人)は、全国に含まれているが、市部又は郡部には含まれていない。

図2からわかるように、日本の市部人口と郡部人口を比較してみると、市部人口が増加を続け、高度経済成長期に入ったところで市部人口が郡部人口を逆転して以来その格差は拡大している。いわゆる都市化の状況を確認することができる。地方から都市への人口移動や、職住が近接している農家や自営業の減少、共働き世帯の増加による専業主婦の減少により、地域社会での人々の結びつきは弱くなっている。大人社会におけるこのような人

間関係の希薄化は、そのまま子どもの人間関係にも影響をおよぼす。

地域において、居住する人々の間でさまざまな社会的相互作用が営まれている場合が「地域社会」であるが、住田によれば「子どもは地域社会において、他人性を経験する<sup>1)</sup>」という。親でもない、兄弟でもない、地域社会における他人とのかかわりの中で、他人のなかに自己を発見することが子どもにおける社会化の第一歩である。地域の他人はまったく見知らぬ他人ではなく、子どもにとってそれは見慣れた顔の知れた他人ということになり、地域社会における近隣住民とのかかわりによって子どもは、将来的な広い範囲での人とのかかわりのいわば「練習の機会」を与えられている<sup>2)</sup>ともいえる。

要するに家族以外の人間関係を体験することができる最初の段階が近所の知り合いとの関係ということになる。親子関係が縦関係、きょうだい関係を横関係ととらえるならば地域社会における異年齢の人々との斜めの関係をもつことで人間関係は複雑化し豊かなものになる。

しかしながら子どもの日常生活のなかに他人の存在が関わってくることで自体がもはや少なくなってしまう。都会のマンション生活であれば、ことさら近所づきあいをする事なく過ごすこともできてしまう。「隣は何をする人ぞ」というような無関心な状況は都会での生活では珍しいことではない。近所のおじさん、おばさんに声をかけられたり家族ぐるみの近所づきあいを体験したことがないような子どもは増えていると思われる。

このような、近隣関係の子どもに対する教育的働きかけの乏しさはそのままその後の人間関係の希薄さに結びつく要素になっていると考えられる。

## (2) 直接経験の不足化と仲間関係の喪失

### ① 子どもとメディアとの接触による直接経験の不足

今日の子どもの私的世界に埋没する傾向にあることは子どもと情報メディアなどとの関係からも明らかである。とくにテレビやパソコン・ゲームなどの家庭への普及が子どもの直接経験を不足させ遊び空間や仲間関係のあり方にも変化を起している。以下においては、子どもの直接経験が不

足している状況を子どもとメディアとの関係とそれによって引き起こされている仲間関係の喪失という視点からみていこう。

この絵(図3)を見て何か気づくことはあるだろうか。これは1980年代に某中学で行われた調査を元に読売新聞に「ニワトリの足は4本?」として取り上げられた記事に掲載されたものである。当時において学力の問題として取り上げられ議論されていたこれらの状況は現在では引き続き高等教育の場面でも起こってきている。

ここ10数年の間、筆者の担当する保育・教育学関連の大学1年生向けの最初の授業において「何も見ずにニワトリの絵を描く」という課題を学生に行わせてデータを収集してきたところ毎年平均約1割前後の学生が前掲の読売の記事と同様の絵を描くことが把握された。

筆者にとっても驚きであったが分母を学生の総数、分子をニワトリの足を4本描いた学生の人数として示したデータを開示すると毎回のことながら当の学生たちにおいても衝撃の結果と受け止められている。4本を描いた学生に理由を尋ねるのだが、当然本物のニワトリに接した経験を持たない。

しかし知識としても2本であると予想できないのはどうしてであろうか。仮説ではあるが現代の若者が幼少のころから直接経験が不足していることに加えて情報メディアなどによる間接経験しか持たなくなっていることから現実や実物にあまり関心を持たないという傾向があるのではないかと思われる。

実際理由を学生に問うても明確な理由は語られないが、生き物としてのニワトリ自体に興味を持ったことさえもないという回答が返ってくる。対象学生の大学の偏差値レベルに関しては比較的高い大学であるから少ないデータが得られるなどの学力を反映した結果には必ずしもならない。そう

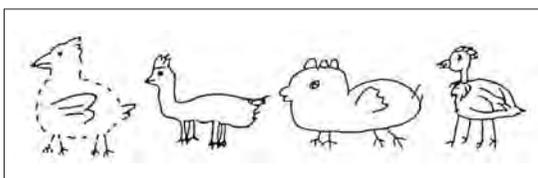


図3 中学生が描いたニワトリの絵

なると、これらの現象の背景にあるのは一概に学力問題とは言い切れないだろう。

このような例をあげるまでもなく、高度情報化社会と称される現代社会において幼少のころからテレビ・ビデオ・ゲーム・パソコンなどのメディアに接触していることによって直接経験が相対的に不足するという事態が深刻化している。

小学校入学前の子どもに対するテレビ・ビデオ視聴の調査によれば「子どもにテレビ・ビデオを1日にどれくらい見せているか」の設問に対して「見せる」の合計は1～6歳児の全体で94%にも及んでいる。さらに年齢が上がるにつれて2時間以上の視聴が増える傾向があることがわかった。驚くべきことに5時間以上の視聴の割合が最も多いのは2歳児の6.1%であるという。

3歳までの幼児にとっては、テレビの画面に登場する人やものと、現実の世界の人やものとの区別はまだついていない。そのような発達段階の幼児が非現実的世界の映像を長時間見ているというのはコミュニケーションの相手がこのように一方通行のテレビによって行われている状況から「テレビに子守り」をさせている家庭での子育て状況が垣間見られる。テレビゲーム・ゲーム機の使用についても年齢が上がるにつれて遊んでいる割合も遊んでいる時間も増加していることが判明した。

このように幼児の頃から情報機器に囲まれ間接的でバーチャルなものに接触する時間が多くなることによって実物に触れ実際に体験するというような直接経験が相対的に減少している状況が危惧される。

## ②遊びの変化と仲間関係の喪失

上記のような状況を背景として子どもの遊びはどのように変化してきているのであろうか。図4から2歳以上の子どもの普段の遊びの内容をみていくと、平成2年度、12年度、22年度の経年変化のなかで「ごっこ遊び」「造形遊び」「絵本」「テレビ・ビデオ」「テレビゲームやゲーム機」など室内を中心とした遊びに増加傾向がみられ、「自転車・三輪車」などの外遊びに減少がみられる。自転車や三輪車に乗るのは1人遊びであるということもできるが、高度成長以前のモノの少ない時代

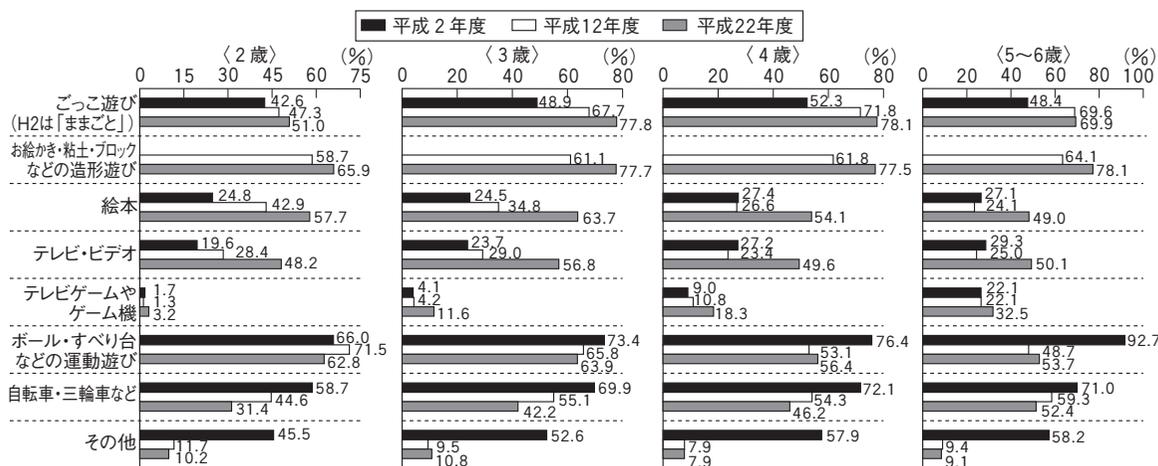


図4 普段の遊びの内容（2歳以上）（平成2・12・22年度）

(注) 調査対象はP.16に同じ。複数回答で、%は各年齢の総数に対する百分率。平成2年度は「鬼ごっこ」「なわとび」「ボール遊び」をまとめて「ボール・すべり台などの運動遊び」とした。平成12年度は無記入を除いた母数で計算しているため、単純比較はできない。

であれば外で子ども同士仲良く三輪車などを交代で貸し借りしながら遊ぶというようなかわりがある存在したことも考えられる。それらも含めて外での遊びは減少し1人でも遊べる室内遊びに傾斜している状況がみてとれる。

また、子どもが普段遊ぶ場所についても「自分の家」「友達の家」が相対的に多く、幼児の遊びの中心は室内遊びである傾向がみられる。安心して遊べる場所自体の減少に加えて①でみてきたような情報メディアとの接触の増加が子ども同士の関係や地域での仲間関係の減少に拍車をかけている状況があるといえる。

## 2. 幼稚園・保育所における人間関係づくりの必要性

### (1) 保護者の人間関係を支える幼稚園・保育所

1. でみてきたように、子どもをとりまく現代社会の問題から、もはや人間関係の発達を家庭や親だけに任せておけるような状態にはないことがわかる。そのため家庭を支え子ども同士のかかわりや仲間関係を育む集団保育の場としての幼稚園や保育所の役割がますます重要になってきている。以下において現代社会の問題に幼稚園や保育所はどのような役割を果たすことが期待されるのかについて考えてみよう。

公園デビューという言葉を目にしたことがあるだろうか。1990年代中頃マスコミで使用されるようになった言葉である。幼児が1歳を過ぎたよちよち歩きの際に母親が近所のいわゆる児童公園に子どもを連れだしてそこに集まっている母子連れの仲間入りを果たすことを表現したものである。当時は新参者である母親がすでに出来上がっている母親たちのグループに上手く同化できないことからデビューへの失敗を恐れ、それが更なる育児不安への引き金になるなどの問題も起きていた。

しかし最近の児童公園には母子のグループや母子連れの母親の姿はあまり頻繁には見出せなくなってきた。2000年代中頃以降この言葉自体も過去のものとなされる状況になってきている。

共働きの増加により日中を保育所で生活する子どもが増加したことも一因であろう。しかし、待機児童の数が相変わらず多い中で、家庭で保育されている子ども達であっても親と一緒に屋外で遊ぶ姿が減少してきているのはどうしてだろうか。母親たちはただでさえ育児に対するストレスを抱えながら、さらに公園で他の母親たちとの人間関係を結ぶこと自体に煩わしさやストレスを感じるためではないだろうか。「公園いじめ」ということばで表現される仲間はずれの状況への恐れなどが

ら、むしろ早期教育の場などに逃げ道を求めている状況があるのではないかとの見方もできる。

早期教育に関してはその弊害が懸念されていることから、習い事の教室に母子を逃げ込ませることを避けるためにも地域で孤立しがちな母親同士の人間関係や仲間づくりを支援するため幼稚園や保育所に子育て支援センターの役割が期待されている。

保育所保育指針の「第1章 総則」には、保育所の役割として、入所する子どもの保育とともに「家庭や地域の様々な社会資源との連携を図りながら、入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭に対する支援等を行う<sup>3)</sup>」と明記され、保育の目標にも「保育所は、入所する子どもの保護者に対し、その意向を受け止め、子どもと保護者の安定した関係に配慮し、保育所の特性や保育士等の専門性を生かして、その援助に当たらなければならない<sup>4)</sup>」とことを掲げている。さらに第6章では「保護者に対する支援<sup>5)</sup>」として保育所における保護者に対する支援の基本が明示されている。

また、2008年改訂の幼稚園教育要領にも、地域の実態や保護者の要請に応じて実施する「教育課程に係る教育時間終了後等に行う教育活動など」においては、留意事項として「家庭との緊密な連携を図る、情報交換の機会を設ける<sup>6)</sup>」など、保護者が幼稚園とともに子どもを育てるという意識が高まるようにすることが挙げられ、幼稚園でも子育ての相談や情報提供、保護者同士の交流の機会を提供するなど、園外の関係機関と連携して子育て支援を担うことを明記している。

育児不安の背景に孤立化した孤独な子育てがあることはこれまでも指摘されている(服部・原田1999)。子育ての悩みを最も共感して話し合えるのは同様に子どもを育てている母親同士であろう。そのためにも保護者の子育て仲間づくりは重要である。子どもが所属する幼稚園や保育所で幼稚園教諭や保育士が保護者同士の出会いや交流のコーディネートを行い、お互いの子育ての経験や悩みを語り合えるような子育て仲間づくりを支援することが期待される。それを通じた保護者自身の豊かな人間関係を土台としてゆとりある子育てのなかで子どもの人間関係も豊かに育まれるといえ

る。

## (2) 子ども同士の仲間関係を支える幼稚園・保育所

子どもは3歳ともなれば家族という小さな血縁集団だけの枠の中にとどまってはいられなくなる。親やきょうだいとは違った遊び仲間との交友を求めていくのが自然である。子どもの数も多く近隣にそのような遊び仲間的な交友集団が自然発生的に存在した時代とは異なり、少子化で地域社会が衰退している現代社会では仲間関係を結ぶことすらが難しくなっている。子どもの遊びにとって必要な「空間」「時間」「仲間」のいわゆる三問が不足してきたといわれる中で、とくに「仲間」に関してはそれを近隣や地縁だけに求めるのが困難であることはこれまで述べてきたことから明らかであろう。

平成10年の中央教育審議会「幼児期からの心の教育の在り方について」答申でも、「現状において遊びはその機会が減少し、屋内での孤立型の遊びが目立つ<sup>7)</sup>」と指摘されている。このような遊びの貧困化は何をもたらすのか。菅野によれば、「遊ぶことで子どもは強い実感をもって対象に関わり人と同じことをしたり共感しあうという対人関係の最も基本的な在り方を経験することができる<sup>8)</sup>」という。幼児期の教育は、遊びによる総合的な活動を通して、子どもが環境とかかわることを基本として行われる。遊びの豊かさが対人関係の豊かさを育むのである。

幼稚園や保育所には子どもが豊かな人間関係を育むことができるよう遊びを豊かに経験させ、子ども同士のかかわりを経験できるような機会をつくっていくことが求められている。機能の低下した家庭や地域社会に代わって子ども同士の仲間関係づくりを支えることが幼稚園や保育所のますます重要な役割となっている。

## 3. 保育内容「人間関係」の課題

以上みてきたように、現代社会の子どもを取り巻く環境において人間関係力を低下させる要因となるいくつかの問題があることがわかった。それをここで整理しておく、まず第一に人間関係における豊かさの喪失が問題となる。家族の縮小

化・地域における人間関係や子ども同士の仲間関係の希薄化により複雑で豊かな人間関係を結ぶことが困難な状況がある。

また高度情報化社会の中で幼いうちからさまざまなメディアに長時間接することで直接経験が不足している状況がある。

ここでは、このような現代社会のとくに子どもを取り巻く人間関係力の低下の問題に資する保育内容「人間関係」の課題を1つには子どもの人間関係を豊かにすること、2つめを子どもの直接経験を豊かにすること、3つとして子ども同士の仲間関係を促すことと設定する。それらについて留意すべき事柄を文部省から出されている幼稚園教育要領解説（以下解説とする。）の記述から抽出することを試みたい。

### （1）子どもの人間関係を豊かにする課題

1. の（2）で地域での近隣関係が衰退していることが子どもの人間関係を希薄化させる一つの要因であることが確認された。そのことから領域「人間関係」ではとくに内容の(13)高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。」および内容の取り扱い(6)が重要になる。解説では「地域の人たちと積極的にかかわる体験をもつことは、人とかわる上で大切である。」とした上で、「地域の人たちとのかかわりを通して、人間は一人だけで孤立してきているのではなく、周囲の人たちとかわり合い、支え合って生きているのだということ実感する」ために、「日常の保育の中で、地域の人々や障害のある幼児などとの交流を積極的に取り入れる」ことを提言している。具体的には「地域の高齢者を幼稚園に招き、例えば、運動会や生活発表会を一緒に楽しんだり、昔の遊びを教えてもらったり、昔話や高齢者の豊かな体験に基づく話を聞いたりするとともに、高齢者福祉施設を訪問して交流したりする」などの活動である。

ここで留意すべきことはそれが子どもの発達のみならず地域の人々にとっても意義のある活動にしていくことであろう。核家族化で家庭内における子育ての伝承が難しい今日、地域における子育てや保育の伝承をこのような交流で実現することが可能となる。幼稚園や保育所では高齢者にとっ

ても幼児と接することが豊かな老後に資するものになることを意識した活動をコーディネートすることが求められる。

内容の取り扱い(6)にあるように「人とかわることの楽しさや人の役に立つ喜びを味わう」ことができるよう簡単な手伝いをする経験をさせたり「生活を通して親や祖父母などの家族の愛情」に気付かせるため機会をとらえて家族のことを話題にし気持ちを考える機会を設けることも大切である。そのための理解を家族に働きかけ幼児と家族とのよりよい関係をはぐくむことで幼児の情緒を安定させることができる。これらのことは幼児が豊かな人間関係を築く土台となるであろう。

### （2）子どもの直接経験を豊かにする課題

子どもにとっての経験は遊びを通じて蓄積される。そのことから解説では内容の取り扱いの(3)において、「かわりを深め協同して遊ぶ」ようになるため「他の幼児と試行錯誤しながらの活動を展開する楽しさ」に言及している。

協同という経験や試行錯誤こそまさに直接経験である。一方通行のメディアとは異なり生身の人間同士の協同の中にこそ試行錯誤をすべき直接経験がふんだんに盛り込まれるのである。留意すべきこととして「大切なことは、幼児自身が活動自体を楽しむこと」であり、このような経験を通して「幼児が試行錯誤しながらも一緒に実現に向かおうとする過程、いざこざなどの葛藤体験を乗り越えていく過程を大切に受け止めていく」ことが挙げられる。

### （3）子ども同士の仲間関係を促す課題

内容の(1)(5)(6)(7)(8)(10)(11)(12)というように全般にわたって子ども同士の友達関係を促すことが「人間関係」では重視されている。解説では内容の取り扱い(2)で「一人一人を生かした集団を形成しながら人とかわる力を育てていくようにする」ことが述べられ、子ども同士の育ち合いを促すことが求められている。「一人一人のよさが生かされた集団を形成するためには、まず教師が幼児の心に寄り添い、その幼児のよさを認めることが大切」であり、「ときには一緒に行動しながら励ましたりして幼児が、安心して自分らしい動き方ができ

るような状況をつくっていく必要がある。」という。このような安心感を土台に子どもは人とかかわる力を培っていくことから、「教師の重要な役割の一つは、教師と幼児、さらに幼児同士の心のつながりのあり温かい集団を育てることにある」とされている。

ここで重要なことは子どもが教師や他の幼児に認められる経験をすることであろう。教師は幼児が「絶えず教師にいろいろなサインを送り、メッセージを発している。」ことに留意し、その「思いを受け止めること」で「どの幼児も受け止められる喜びを味わうと同時に、幼児は受け止める教師の姿勢をも無意識のうちに自分の中に取り入れていく」のであり、「このような姿勢で接する教師と生活を共にする中で、幼児は互いを大切にする姿勢を身につけていく。」ことになろう。

### おわりに

本稿では、子どもを取り巻く社会の変化に伴う問題のうち、とくに子どもの人間関係力低下の原因となるものを資料から取り上げた上で、幼稚園や保育所に求められる役割および保育内容の1つの領域「人間関係」で課題になることを抽出することを試みた。保育内容「人間関係」では、人とかかわる力と自我の育ちに必要の人との基本的な信頼関係を形成する力を養うことをねらいとしている。

子どもが家庭や地域を離れて初めて出会う集団保育の場として、人とのかかわりを通じた保育の実践を支えることが今日の子どもの問題に対して幼稚園や保育所が果たすべき重要な役割であり、保育の内容領域としての「人間関係」の意義もそこに見出すことが出来るのである。

### 【注】

- 1) 住田正樹『地域社会と教育－子どもの発達と地域社会－』九州大学出版会2001年 p.38
- 2) 同上p.40
- 3) 『保育所保育指針』フレーベル館 2008年 p.4
- 4) 同上p.5
- 5) 同上p.31
- 6) 文部科学省『幼稚園教育要領』教育出版 2008

年 p.22

- 7) 文部省『文部時報(10月臨時増刊号)』ぎょうせい 1988年 p.69
- 8) 菅野幸宏「幼児期の遊びと学習に関する一考察」『弘前大学教育学部紀要』第87号 2002年 p.210

### 【参考・引用文献】

- 財団法人日本統計協会『統計でみる日本2012』(株)産業統計研究所2012年
- 厚生労働省編『厚生労働白書 平成23年版』日経印刷会社2011年
- 日本子ども家庭総合研究所『日本子ども資料2012』KTC中央出版2012年
- 内閣府『子ども・青年白書平成23年版』2011年
- 国立社会保障・人口問題研究所編『平成22年 わが国夫婦の結婚過程と出生力－第14回出生動向基本調査－』一般財団法人厚生労働統計協会 2012年
- 財団法人日本統計協会『統計でみる日本2012』産業統計研究所2012年
- 厚生労働省編『厚生労働白書 平成23年版』2011年
- 田嶋一・中野新之祐・福田須美子『やさしい教育原理』有斐閣 1999年 p.83.
- 内閣府『少子化社会白書 平成21年版』佐伯印刷(株) 2009年 p.46
- 福井逸子・柳澤亜希子『乳幼児とその家族への早期支援』北大路書房 2008年
- 星野政明『新版子どもの福祉と家庭支援』みらい 2010年
- 橋本真紀・山縣文治『よくわかる家族支援論』ミネルヴァ書房 2011年
- 原田正文『子育ての変貌と次世代育成支援－兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待防止－』名古屋大学出版会 2006年
- 原田正文『育児不安を超えて』朱鷺書房 1998年
- 服部祥子・原田正文『乳幼児の心身発達と環境－大阪レポートと精神医学的視点－』名古屋大学出版会 1991年
- 無藤隆『早期教育を考える』日本放送出版協会1998年
- 文部省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 年

## The Problem of Modern Society, and the Subject of the Contents of Child Care and Education “*Human Relations*”

Sakakibara, Hiromi\*

本稿は、子どもを取り巻く社会の変化に伴う問題のうち、とくに子どもの人間関係力低下の原因となるものを各種の資料から取り上げた上で、幼稚園や保育所に求められる役割および保育内容の1つの領域「人間関係」で課題になることを抽出することを試みた。それによって、現代社会の子どもを取り巻く環境において人間関係力を低下させる要因としてまず第一に人間関係における豊かさの喪失、第二に直接経験の不足、第三に仲間関係の崩壊があると把握された。このような問題の解決に資する保育内容「人間関係」の課題を文部省から出されている幼稚園教育要領解説の記述から抽出することを試みたところ、地域や家庭との連携、協同と試行錯誤、一人一人を生かした集団づくりが教師には求められるということが確認された。

キーワード：現代社会、豊かさの喪失、直接経験の不足、仲間関係の崩壊